



思いきり愛されて駆けてゆく六月、サンダル、あじさいの花

俵 万智

雨に濡れた紫陽花や薔薇の花に、思わず見とれてしまう頃となりました。紫陽花の花言葉は「移り気・冷淡・高慢」が一般的ですが、色によって実は違うそうです。ちなみに、ピンクは元気な女性。青は忍耐強い愛。さらに、花全体のイメージから、家族団らん、団結、仲よし、友情、という花言葉もあるとか。皆さんの好みの紫陽花の色はどれでしょう。

さて、とかく敬遠されるこの梅雨の時季、雨の中で咲き誇る花の姿は、他の季節とはまた違った美しさや味わいがあるものです。これらの花を題材にした句を幾つか紹介しましょう。まず、梅雨を代表する花、紫陽花から。「紫陽花や昨日の誠今日の嘘」正岡子規。梔の花も雨の中かぐわしい香りを放って咲いています。「今朝咲きしくちなしの又白きこと」星野立子。松尾芭蕉は栗の花を「世の人の見付け(みつけ)ぬ花や栗の花」と詠みました。

日常の中で、ふとしたことに目をとめ、心に映ったことを言葉で表現する。口で言うほどたやすいことではありませんが、私たちも、表現することにためらわずに挑戦したいものです。浜松文芸館のキャッチフレーズ「ココロとことば」とあるように。そして、言葉でお互いがしっかりつながっていけますように。

### 浜松文芸館主催講座 開講中！

ただ今、6講座を開講中です。「文学講座(春)」・「文章教室Ⅰ」・「川柳入門講座」・「短歌入門講座」・「俳句入門講座(前期)」・「声であらわす文学作品」。多くの皆様に受講していただき、講師の先生方を中心に、楽しい雰囲気の中で充実した講座が行われています。とにかく、感心するのは、どの講座も、参加されている方の学ぼうという熱い思いに満ちていることです。学びとは、決して学生時代の一時期ではない。人生、生涯学びであり、大事なものは学ぼうとする心と行動だということです。しかも、こうして全く知らない者同士が机を並べることによって、新たな人と人との繋がりが生まれ、学びも深いものになっていくのでしょうか。これも浜松文芸館が、少しでも皆様のお役に立てればと思っていることです。

また、子供たち対象の講座「夏休み絵本づくり講座」「10歳からの少年少女俳句入門講座」や「文章教室Ⅱ」の募集も始まりました。学校の授業とはまた違った視点で学べる講座です。是非、お子様の背中を押してあげてください。応募をお待ちしております！

浜松文芸館講演会 講師 和久田雅之先生「浜松文学紀行」を掲載します！→裏面



浜名湖・伊佐治川・父・母・兄姉・腕白小僧

昭和46年(1971)、68歳になった詩人は「うづくような浜名湖への郷愁」から、思い出の浜名湖と年毎に変貌してきた沿岸の景観に思いを馳せ、それを素直にうたい上げようと取材を重ね、写真を撮り、3年半後の昭和50年、『清水みのる詩集 わが浜名湖』を上梓した。つぎにそのいくつかの詩片をあげてみる。

水田のみどりの中を/(略)/木立に囲まれて点在した/水車小屋のある風景は/この部落から川下に向  
かって<sup>ひら</sup>展げ/湖畔の風物詩を豊かに彩っていた コトコトコットン と/同じ旋律を繰り返して/休  
みなく廻り続けた水車 のどかな<sup>せせらぎ</sup>清流の瀬音に/やさしく溶けこんでいた調べは/亡き母の子守歌  
にも似て/私の胸から消え去ることはない (略) (「伊左地川慕情」)

塗る 塗る 塗る/<sup>たんぼ</sup>田圃の泥を体中に塗る/頭のでっぺんから足の爪先まで塗る 梅雨あけが待ち  
切れなくて/面白くて 楽しくて/みんなで塗る なんともなんとも塗る 泥んこ坊主が勢  
ぞろいすると/学校前の橋のたもとに隠れる/草むらの蔭に身をひそませて/誰も通らなくなるまで  
隠れる (略) (「はだかの知恵」)

この詩には、「私の小学生時代、大人は六尺や越中ふんどしを使用したが、子どもたちにはパンツも猿股もなかった。しかし、まっ裸で遊ぶ子らは駐在さんに罰金をとられるとい  
っておどかさされた。そのための知恵がこんな遊びとなった」の註が記されている。

一お馬にのって/一ぼっか ぼっか おうしん/父の得意な乗馬ぶりを見送ると/母はよくこんな童唄<sup>わらべうた</sup>  
を口ずさんだ きょうも急患が出た/父は愛馬を<sup>こ舎</sup>小舎から引き出すと/ゆったりとその背にまたがる  
夕映の湖岸の一本道を行く父/馬上豊かな村医者<sup>りん</sup>の父/手綱を握る凛とした姿には/浜名湖をへいげい  
する風格があった 自慢の髻はひねり続ける/駐在さんも敬礼して通り過ぎる/患者の家に近づく  
と/古武士もどきの咳払いが一段と高い (略) (「父と愛馬」)

浜名湖の<sup>うみ</sup>湖開きは/弁天島の花火まつりで始まる 七月の夜空に明滅する遠花火の/そこはかとな  
き哀しさ/その夜景の中に 亡き母をおく 家の前の土橋には涼み台/そこに坐る母/ 糊つけ浴  
衣がよく似合った母/つつましい夏すがたを/こよなく愛した母 尺玉の打ちあげに/母は目を細め  
てつぶやく/一もう少し近くで見られたらねえ その度に線香花火に火をつけた私/一伊左地川の  
川開きだよ 燃えても束の間の光りに/消えもこるやさしい顔/私はこの指先に母を見た/じっと見  
た (「母と花火」)

これらの詩には、みのるの平穩で物質的にもゆたかだった子ども時代の様子がありあり  
とうかがえる。この生活が一変したのは、3歳年上の兄貫一の大けがであった。

小学二年のある雨の日、仲間と下駄ばきで校庭の鉄棒を楽しみに出かけた兄は、雨に濡  
れた鉄棒に飛びついた瞬間、手を滑らせて真下に脱ぎ捨ててあった下駄の上に仰向けに落  
下、背中を強打して気を失ってしまった。この時右手の神経系統を痛めてしまい、一生障  
害を持つ身となってしまった。父米造は、村医者<sup>りん</sup>の後継者を失ってしまったショックのためか、それから間もなく脳溢血で倒れ、患者の診察も思うようにできなくなってしまった。  
大黒柱と後継ぎの相次ぐ不幸は、清水家を奈落の底に突き落としてしまったのである。